昭和14年12月1日（金）

第四回興亜奉公日。朝巖新聞を余に持来し、両児を負ふ間もなく朝食を与ふ。遂に余負はずして出勤す。納税の多きは、余の分が加算されたる旨を述ぶ。市役所にて調査貰ひし由。此日天候前日と大差なし。電報と電話と旬、月計、消耗品現在高報告書発送。五時三十分引上ぐ。風呂沸く。巖両児を一緒にして負ふ。間もなく飯を摂らす。余夕飯後入浴、両児を入れたり。此の夜巖見えず、早く寢床らし。余寢床前、再び入浴。ラジオ前月分巖8、朝吹氏4、局2。

昭和14年12月2日（土）

朝四時頃より降雨。八時より赤児を負ふて外出せんとす。猶細雨歇まず、見合わす。泣くこと甚だし。朝食前の短時間は巖負ふ。九時雨歇む、其の後曇り、時に晴れ。山本龍耳記者臨局。電報総計表、後納新聞料金掲上方に疑義あり。中津局員と意見一致せず。上司に電報経て伺いす。五時半飯る。赤児の食事出来るまで負ふて外出。野口氏より余の局、夜は中津局より注意あり。取消しせる旨申出づ。余の書方にも多少悪き点あり。穴がち叱るべき程にてもあらざりしが、余に無断にて措置せることは、不可なりと戒告置きたり。此の問題は更に書面にて指示を仰ぎ、解決せり。

昭和14年12月3日（日）

是永氏当番。朝巖両児を負ふ。食後は余負ふ。九時出局。例規類纂加除、総計表調製。天気晴れなれど風寒し。永江氏の行火を借りたり。朝火を入れ夕方まで持耐えあり。午後ポテト30銭、是永氏に求めさす。永江氏来

客、不来。是永氏に土産に遣わす。是永氏退出後も居残り、五時前眠る。巖帰り居る。食事前赤子を負ふ。食事後も一時間外出。風寒く帽子と毛のマントを着せたり。此の夜半智子泣く。風邪の気味と愛子言ふ。中尾氏来翰。

昭和14年12月4日（月）

此日より巖多忙となる。食事は余独りにて赤児に摂らす。食後負ふ、前例の如し。但し外出せず。此朝風寒く、手凍ゆ。道子より天香師四日再び福岡に来られ、島井氏邸にて供養、夕食を頂きつつ御話を承る。出欠通知方、往復葉書照会あり。午後五時三十分と云ふ。道子より欠席の旨回答せりと。曇り、時々晴れ。此日出局の際、本町の古物屋より、火鉢70銭と云ふを60銭に負けらせて求め出局。ラジオ昨日より故障。午後三時五十分より、永江氏火鉢を余に貸し呉る。遠慮なく借る。寒さ強し。午後五時十分頃眠る。風呂沸きたり。巖眠り居りたるも、後始末に手一杯。赤坊に夕食を摂らしたる後、余食べる間を、巖守り呉る。夕食後入浴さす。其の儘寝かす。外出せず。大長氏ラジオ代払込む。

昭和14年12月5日（火）

朝の間多少曇り。柳ヶ浦飛行場竣成後、飛行機早朝より飛来するもの多し。今朝も三様編隊にて二組、単機飛翔幾つか旋回す。赤子に朝食を摂らし、負ふて飛行機を指示す。旭日に金属が反映して燦然として眩し。日向は暖かし。九時二十分眠宅。藁灰注文、此朝出来ず。午前中竹折氏臨局、東吉富貯金事故の件なり。相談所に居る大塚某の所為と認めらる。四時四十分眠る。巖眠って居る。一時間程、和博悦子を連れ赤坊を負ふて外出。北部

小学校に遊ぶ。児童十名程残り、鉄棒に縋り遊び居る。女生徒十名程販宅するを見る。販りて夕食を摂らす。智子には酌量、夜甘藷飯二杯平らく。快晴。藁灰愛子尽力、秋吉氏より貰ひ一箱持来る。巖持行くと云ふを、明朝にせよと注意す。

昭和14年12月6日（水）

快晴。赤児に朝食を摂らし、四十分間程外出、守りす。九時十分となり、急ぎ出局す。此の朝藁灰持参、既に余の火鉢に火を取り居る。遺骨来、国旗掲揚方申越し、鼠害の為、樹て能わざりし。子女手当て請求す。此日は永氏より辞職申出づ、後より聞くに満州に進出するらし。夕食時まで両児を負ふ。六時近く販宅。夕食を摂らす。野口氏販り赤坊を見る間、余夕食を済ます。其の後余の部屋に遊ばせ、或いは抱き居る。七時半に至り愛子に渡す。新聞夫れより見る。幾部見貽（おく）ること多し。

昭和14年12月7日（木）

快晴。朝食を摂らし九時十分まで負ふ。電報まつを要する旨通知により、豊田町古梶原を訪ね20銭貰ひ来る。朝橋内氏来局、甘藷を土産に持来る。30分程色々咄す。田尻の藷は美味なりと云ふ。風呂敷借用、何等か返礼の積もり。四時半販宅。藷は全部野口氏に届けさす。後より永江氏にも幾分遣ればよかったと思ひ、又四時五十分両児を負うて、夕食前外出。夕食後入浴。寢床前再び入浴。恒例の如し。新聞は残りなく見終わる。

昭和14年12月8日（金）

快晴。九時まで四十分間外出。前例の如し。午後四時

四十分、ラジオを試験の為、中井に持参す。主人不在。試験の結果異常なし。再び局に持戻る。五時五十分帰宅。野口氏余の後を追うて来る。昨の諸を頂く。夕食後両児を負ふて四十分間外出。

昭和14年12月9日（土）

晴れ、少し寒くなる。九時まで三十分余外出。甘藷半分持行けと愛子云ふ。別に大鉢箱を局より携行の要あり、断る。公局報等未処理数日分ありしも帰福す。五時、道子は余の来週となるものと思ひ、敢えて準備せぬ旨を言ふ。団子、甘藷食ふ。林檎20求めしむ。柿、猶幾つかあり。三つ程頂く。久子早飯り。九時半寝床。

昭和14年12月10日（日）

雨降り、午後より歇み、曇り時々陽射す。風強く寒さ加わる。読書新聞社より土の文学送付越せり。是にて安堵せり。唐津橋本氏宛坂巻氏への書面、同封発送せり。火鉢を例の箱に入れ、股火をするに具合良し。何れにも外出せず。早く寝床。

昭和14年12月11日（月）

曇り、午後より陽光を仰ぐ。風風ぐ。昨夜は風強く、硝子戸にひゅーひゅー音して擾々敷きこと甚だしかりし。鯛の有無、佐世保に尋ねる葉書発送す。鯖飯を馳走の同意を得たる為、市場に購入に出かける積もりなりしも、今夜は粥食にすることにて中止せり。

昭和14年12月12日（火）

晴れ。十時より道子と外出、市場に赴く。恰度鯛を販売

し居りたる為、20銭分求む。十四尾10銭、七尾は頗る高し。鯖二尾25づつ50銭。白玉粉19、奈多甘藷三百匁10を四百匁12銭、神柴二把4銭を購入販宅。鰯は潰し鯖の頭も一緒に混淆し、別々に揚げて貰ふ。道子更に林檎20銭分四ヶ求め来る。此の夜鯖飯頂く。気温上昇、日中頗る暖かし。

昭和14年12月13日（水）

午前中曇り、午後より晴れ。午前中も時々陽光を仰ぎ、日向ぼっこ一時間程す。中尾氏手紙遣り、序でに金貳円佐世保に、鰯を注文分小為替取組む。今朝までタドン大赤々と、湯も沸ぎり居る。日中割合温暖なり。今朝障子の隙間に目張りす。火鉢の火は翌朝まで持越し頗る経済なり。日中温暖なる為かも知れず。今日南京陥落二周年記念日。

昭和14年12月14日（木）

大体天候前日と変わりなし。日中割合温暖なり。午後二時、中央郵便局見学のラジオあり。平塚様の挨拶と御咄とあり、御懐かしさに不堪、暫く振りにて手紙書き近況をものす。

昭和14年12月15日（金）

此の朝、昨の残り火に木炭を補ぎたるに、遂に其の儘消え果てぬ。十時頃新聞を階下に見て終わり。近づきたる際、佐世保より鰯一籠届きぬ。澄子背骨を取り、余鉢にて磨る。背骨を取り終わって、道子と市場に出掛く。余は此の間も熱心に摺り潰し居たり。兩人市場に行く序でに、上杉三郎（嘗て出征の際、余の家を宿にせし兵士の

一人)に慰問袋小包を発送せり。曩に同氏より恩賜の苘を送り越せし為、返礼に久子より菓子を、其の他自製の袋物を入れたるもの。表書きは(木綿切れ、正岡氏に調製して貰ひたる由)余忙しき手を休めて書き上げたり。市場行きは正岡氏も同伴せり。0時半頃販来、次いで揚げ物を始む。終了四時。鱈140尾二円とすれば、拾銭7尾に相当、当市場と余り大差なし。但し新鮮の程度は、送付の物は遙かに新らし。容器に付き心配せしも、有り合わせの物(ブリキ鉦)発見。五時より納入、各50ヶ、上田谷地へは海老少々入れ梱包せり。六時近く夕餐うどん、ソバ、更に御飯。市場に鯖少なく価も高き為、鯉を求め来たりたる由。余は特に頂かず。日中暖かく、春の如し。

昭和14年12月16日(土)

朝の間陽射し暖かく、次第に曇る。小包を幾重にも包装し荷札まで取附けたり。幸に線も郵便用一卷、麻のがありたれば之を使用せり。郵送60銭(二個にて)。久子遅出。柳原先生より、今日会合あり、出席方葉書にて来照あり。中津福地先生より、年末クリスマス喜捨方袋入りにて、新聞贈附あり。年末だけ忘れずに送り越さるとて、不平らし。今朝、食麵包(めんぼう)にジャムを付け頂く。誠に物質欠乏の際、勿体なき心地せられて痛まし。上田谷地と三ツ谷に葉書発送す。柳原先生に不参。夕方小雨、道湿润程度。向上を読む。九時半を過ぐ。夜、糯米飯を頂く。

昭和14年12月17日(日)

朝曇り、時々陽射しあり。午後より晴天。秀夫来。坂巻

源次郎氏より来翰。数日不在の為、返事遅延せる旨、及び本人承諾の旨申出あり。竹野実氏、先月二十五日附け書記昇進の旨、通告し来る。十五年補になってから十年とあり。午後四時夕食。変わり飯造る。六時販りて後、理髪して貰ふ。久子販り60銭分を40銭にて、之を橋内氏に持行くこととなる。マッチ亡くなると恐慌を来たす。今朝、昨夜の残り糯米飯を頂く。比較的気温暖かなり。夜になりて明日の仕度にかかる。

昭和14年12月18日（月）

午前二時三十分起床。出発前三十分間光誌を読む。五時出発、同二十五分駅着。売店開かぬ為、新聞は小倉にて求む。晴れ、曇り半ばす。渡辺福重氏より、余の貯金通帳、机の中を整理中発見せりとて送り越さる。切手八銭貼付あり、検閲に提出す。慰労金四十六円、局員分105円は昨年より25円多し。永江氏54、是永31、野口20分配す。巖に坂巻カネ代採用方、及び同居に付き諒解を求む。愛子が反対したるを理由に、喜ばぬらしき態度を見、同人採用を中止の不得已に至りぬ。一面永江氏、各方面に涉りを附けたらしく、高女卒後、扇城高女にタイプライター修得者として採用され居る者を、同校小使いが推薦越しの履歴書あり。更に三余女学経営の山本利夫氏より申込みありと云ふ故、前者は現奉職中故、当該校長の推薦なら可なるも、小使いなら不可と認め、其の儘として販る。巖の話に値を保てり。鱒送付越せりと、愛子背開きにして乾燥、白胡摩を附し居る。赤子負ふ。

昭和14年12月19日（火）

朝冷ゆ。巖よりラジオ申込七件受入れ、送付書添付発送

す。ラジオ器械売却分250、申込料金100は慰労会費に繰り入れる。慰労手当金、此の日到着、分配を了せり。五時飯宅。赤子負ふ三十分、夕飯を与ふ。風呂に入れたり。八時より新聞を見、九時五十分までかかる。入浴二度。十時過ぎ寢床。此日中暖かなり。

昭和14年12月20日（水）

朝快晴なるも風寒し。八時赤児に食をやり一時間負ふ。出局すれば山本氏既に臨局。志願者小野貞子を連れ居る。上津村の者、通勤は出来ぬ故、永江氏方に寄食、賄い料12円にて約束すと云ふ。臨時採用す。饅頭を買ふて振舞はる。五時二十分飯宅。両児負ふ。三十分後夕食を摂らせ、再び負ふ。信子泣くこと甚だし、即ち飯宅す。六時五十分より新聞を見る。九時三十分就寝。日中殊の外暖かにして、巖襦衣一枚にて居ると。

昭和14年12月21日（木）

朝快晴なるも頗る寒し。昨日より朝炬燵を持込む必要なしと、巖に断る。朝餉を終わり新聞を見る。赤児抱き、飯を食わし、負ふこと50分、九時出局。快晴。新聞では糯米搗き賃14銭、福岡15銭。而して中津市街は13銭と決定、公表。小野貞子に身体検査に、午後三時二十分頃やる。五時飯る。赤子負ふ30。夕食を摂らし、余の食時間、巖守り、食後再び負ふ。七時飯る。新聞は八時より見る。

昭和14年12月22日（金）

朝五時三十分野口氏を起こす。薄雲漲り、幾分寒し。九時過ぎ負ふ。臨時事務員の辞令二十日付け、小野氏に

交付す。曇りなるも風なく日中暖かなり。中尾氏来翰。電報原書発送、一日遅延せしめたり。千円国債二枚予約取消し方申出あり。余懇示、危うく挽回す。販る頃快晴。今日曇天、前日までの様に日向ぼっこ出来ざりしと。巖小母車にて、赤子を一時間連れ行く。販宅後、赤児と余と同時夕食、巖の赤子を依頼す。入浴、赤子を入れたり。九時頃野口氏販る。此日より同氏為替係となる。

昭和14年12月23日（土）

冬至、朝より暖かなり。天候如何と案じたるも、意外に快晴となる。朝食を与ひて、巖信子を連れ外出。余智子を負ふて、途中にて巖より信子を受取り抱く。高羽富次氏に振替払込書発送。駒次に戸籍抄本廻送方に付き手紙出す。巖余が福岡行き決行と思ひ、道子宛50円祝儀持参。蛭子町衣裳屋へ松山行き速達、市外不足22銭受取りに出掛く。満州へ価格表記十円送金に対し、門司より大蔵大臣の許可証を要する旨にて、返送越せるに付き取運ぶ。五時販る。直に両児を負ふて、和博悦子を連れ、北部小学校側より裏道沿いに販る。途中和博の足を踏み、泣かれて困る。此日巖、海に子供と貝拾い、蛤??を二合程拾ひ来る。水道傍らにて調製し居る。夜外出見合わす。八時過ぎ、巖愛子と喧噪の態、余の部屋に来れる為、諄々戒飾し置けり。十一時四十分寢床。

昭和14年12月24日（日）

朝恒例の如し。九時出局。国債報労金、分配を了し、午後一時十分出発。六七分汽車遅著。五時十分到着。昨日不來の為、此日準備し居らずと云ふ。白玉団子及び餅小三ヶ、隣家より預ける分頂く。巖より祝儀渡す。市内

は夜来降雨の由にて、雨、溜まり居たり。平塚様より返信あり。林檎22四つ求む。

昭和14年12月25日（月）

大正天皇祭。為替昨日三時迄、本日休暇。十時道子と外出。市場行き鱈20求め、十八尾を得たり。此を団子に丸め、余調理中、妙子赤児を負ひ一女を連れ、年末礼に来る。暫く話す内、久子を貰ひたしと称する者の姉なる人、次の弟と共に来る。之を二階に招じ色々咄す。相手の父はビール会社の技師として多年勤務、一万円の退職金を貰ひ、朝鮮に林檎の植樹をなし、成功を見ざる間に病気に罹り、四十余にして早世し、六人の子女を擁して母は小学校に教鞭を執り、長女30はビール会社の事務員に、二女は神戸に女中同様な生活、三女は看護婦、長男24、四女肺逝、二男17貯金局、三男高小、久子の相手は長男にして福中卒、同盟通信社にありと。長女は目下退職し、家事に精励の由。

昭和14年12月26日（火）

朝より曇り、三時頃より降雨。黎明に歇む。後一時霽れ、陽光を仰ぎたるも、間もなく曇り。愛子より式服とか蒲団とか調製方申越す。澄子其の手紙を持参す。序でに嫁したくないと申居る旨、性格が合わぬなどと云ふ故、注意を与ふ。道子に年金受取らしむ。年末恒例に依り、道澄兩名に各20、久子10を与ふべきも、百六十円余支出の関係もあり、前者に各10、後者5を与ふ。此の朝胃停滞、前夜の食物不消化の儘残留、腹圧に依り吐瀉。夜髯剃り。餅米にて炊きて貰ふ。

昭和14年12月27日（水）

昨朝の食物停滞原因は、火鉢に依り脚部に血液集中の結果、消化機能の活動を阻害するものに非らずやとの疑問を以て、終日火鉢を股火用を使用せざりしにも不拘、依然として同一状態を繰返しあり。乃ち本朝も同様吐瀉す。依って摂食、胃の負担を過重にすることが重大の要素たるに気付き、節食主義を採ることとせり。此の朝、例に依り二時三十分起床。釜中に入れある糯米食を頂き、五時出発す。熱の兆しあり、胃に起因するらし。九時十五分着。此の朝久子より、屑菓子一袋飯台に置き、手紙に其の要旨を書きあるを認め、其の儘持参。麻生局長臨局、耳疾治療に来津中の由。直方日高氏に1, 00、飯塚光友会広方豊吉氏宛弔電発送、同氏息正長少尉、昨年召集に応じ従軍中、本月五日北支戦線にて名誉の戦死を遂げらる。同氏は一昨年山口高商卒、麻生商店に入りたる一人っ子なりと云ふ。二時武藤義夫に為替組む。内1, 00は道子の注文納豆、他は余の注文青豆。販りて赤兎負ふ。巖午後より出かけたるやにて、猶不販。三十分程して販る。夕食後再外出せず、余の部屋にて遊ばす。野口氏昨夜十一時頃販宅。午餐も食する余裕なかりし程、多忙を極めたりと。夫れに計算が合わず。夕食は永江氏に振舞われたるやに聞く。巖も余りに遅き為、迎えに行かんとして居たる際、販宅せりと。此の夜は七時頃販宅。晴れ。

昭和14年12月28日（木）

曇り、驟雨模様。朝八時から九時、巖信子を負ふて外出。余智子を抱き外出。巖の方、早く帰宅。余九時販る。出局の際、鰻井五つ注文したるに、誰も食わぬと云ふ。是

永氏と夕食を馳走せんとしたるものの、此の齟齬に遭い途方に暮る。先方より取消しの要否を質ね来る。仍って取消す。更に是永氏に頼み2,00菓子を買ふて貰ふ。1,00は是永氏に土産に遣る。此の日大工、先日細工分計算書持参、5,50支払ふ。給料交付、小野氏に6,00支出、10,00巖に渡す。野口氏九時過ぎ帰宅、夕食招ばると。信子、余が摂食中吐瀉す。智子は昨夜数回下痢すと。此夜入浴。粥を与ひ外食せず。

昭和14年12月29日（金）

朝晴れ、九時頃より曇り。為替窓口混雑甚だし。村上局長、竹折主事、貯金50億功労者として、部外者一名と共に其の筋より表彰せられし旨、写真入りにて新聞に報道さる。仍って祝電を両氏に発送。村上氏よりは返電を給わる。赤児、御も湯のみにて警戒す。

昭和14年12月30日（土）

智子炬燵に寝かし、信子を負ふて外出。九時より出局。一つ松局長の巖父逝去、明日午後二時より葬儀の由。公局報大部分処理済み。快晴、風多少あり。余の保険領収帳、無余白に対する調製方に付き、上原主事に質し、是永氏本局に出頭。此夜も九時過ぎ野口氏飯る。赤児夕食は粥を、一椀を二人に与ふ。智子炬燵に寝かし、信子のみ巖守り。和博、悦子と外出。智子泣くこと甚だし。遂に余、之を抱き守り三十分。

昭和14年12月31日（日）

朝の内快晴。両赤児を守り外出。九時五分帰宅。風を除けては暖かし。隣家の小母さんに鰻一円（百匁）、鯊（は

ぜ) 1, 00注文す。先日気の毒かけたる礼心なり。午後一時、此等を受取り出発。列車混合ひ、各駅毎に駅員整理に時間を空費す。「誰でも早く販りたいのですから中央に詰めて下さい」声を嗄らして叫ぶ。容易に緩和せず。入口のみ充塞す。余数駅間立ち往生したるも、行橋まで到らず腰かけらる。本線も同様、爰にても数駅立ち往生す。五時二十分販宅。昨日販ることと思ひ居たりとあり。唐津問題だめになり。此日に延期の理由を話す。坂本先生只今朝鮮より還りたりとて、尋ねて来て下さる。今父も還る筈故、少時寛ぎ待たるる様咄したるも、多忙らしく御帰りになりたりとて、大蜜柑一籠土産に頂けり。餅は二十七日搗き、二斗にて2, 40を2, 50人夫に与ふと。夕餉頂く。林檎20。